

大会名 第7回 5年生選抜研修大会

日時 1月20日(土) 1月27日(土)

会場 小石川運動場/南豊ヶ丘フィールド

東京都少年サッカー連盟

委員長

吉實 雄二

技術指導部長

井上 雅志

文責

技術指導部

大泉 伸幸

結果概要

	試合数	得点数	1試合当たり得点数
今大会	24	108	4.5

講評 東京都少年サッカー連盟技術指導部が目指す理想の選手育成のために

①観て判断する

攻撃においては、特に5ブロックがコンセプトを持ち、深みと幅を意識しながら攻撃の組み立て(ポゼッション)にチャレンジしている印象が強かった。選手達は選択肢を多く持つためにオフザボールの際「認知」することに心掛け、失敗を重ねながらも、試合を追う毎に良い形のチャンスやゴールシーンを多く演出していた。

判断の面では、ピッチ内の情報(ボール・ゴール・味方・相手・スペース)の中で、次の2点に強い印象が残っている。ひとつ目は、「味方の状態」で、身体の向きが前に向き切れていないにも関わらずスルーパスの判断をしているケースが見受けられた。身体の向き・一歩目の出足・動き出しのスピード等、味方の状態に応じたパスの質を意識できれば、より確実に受け手が次にプレーしやすいボールを繋ぐことができる。ふたつ目は、「相手の状態」で、パスの受け手に対し明らかにマークする相手が狙っている状態を観ることができずにインターセプトされているケースが多かった。キックの直前に、パスコースを変えることや、実行するギリギリまで、味方・相手の状態を観て欲しい。また、受け手は自分のマークの状態が観えていないにも関わらず、常にパスを要求してしまう選手が多く見受けられた。守備の原則と同様に、攻撃時においてもボールと相手を観ておく必要がある。受け手と出し手の関係性が理解できる選手を目指して欲しい。

守備においては、特にサイド突破されている際、ファーサイドや2列目のケアができずに失点に繋がるケースが多かった。自分のマーク以外、視覚となるスペースまで守備の視野を広げられる選手が育ってくることを期待したい。

②判断を伴ったテクニックの発揮をする(ファーストタッチの質・プレーの選択)

技術レベルは高いものがあり、スルーパス等、多少ズレてしまった場面はあるものの、判断が伴っている際には、技術的なミスは少なかったように感じる。ミスの割合では、ざっくりな感覚ではあるが判断ミス7割・技術ミス3割程度ではないだろうか。

「キックの飛距離=視野の広さ」と、例えられることもあるが、繊細なテクニックやショートパスを多用したポゼッションに特化している傾向もあり、ロングレンジでのキックに長けている選手は少ないように感じる。その点において、ゴールから逆算した攻撃の優先順位を意識した崩しと言うよりは、ただ単に飛ばしているだけなのでは?と、疑問符が付く得点シーンが多少なりともあったと感じた。

ゴールから逆算したプレーモデルを理解することで、どの技術を磨くべきか?どの場面で技術を発揮するのか?どう味方を生かすのか?を具体的にイメージすることを求めたい。しかし、9ブロックが、右サイドから左ベナ付近ヘグラウンダーの速いパスを通して得点につながったシーンは、とても参考になる素晴らしいゴールだった。次のトーマスカップでは、その様なスベクタクルな展開が多く観られることを期待したい。

また、コンパクトに守備を行い、ボールを奪った後に無理して前へ急いで攻撃をしたため、簡単にボールを奪われるケースが見受けられた。同じような状況でミスを繰り返してしまうということは、判断ミスという理解(修正)がされておらず、コンパクトにしてボールを奪った後のプレーモデルが整理できていないのは、今後の課題であると感じた。

③攻守に関わり続ける

初日・2日目は、ピッチサイズに違いがあり、11ブロックは狭いピッチの初日には選手の距離感がバランス良く、くさびに対し数的優位を作るための縦への運動が多く観られた。他のブロックも、オーバーラップからのサイド突破等、前線への関わりにおいては、積極性や運動性が高かったように感じた。

求めるのであれば、インナーラップ等、様々な動き(即興性)を織り交ぜることで、特にバイタルエリアでは、個の技術だけでなく、組織で崩すことで攻撃の幅が生まれる。ただ、2列目や逆サイド等、攻撃の厚みを作ることにゴールシーンも多く観られたことは良かった。

守備面では、4ブロックは失点が多かったものの、ピッチサイズが広がった2日目の初戦では、体格差のある11ブロックに対しフォアチェックからコンパクトに守備の厚みを作り、ゴールを奪う等、攻守に関わり続ける運動量で勝ち切ることができたゲームだった。

④積極的にコミュニケーションできる

コミュニケーションが飛び交い活気があるチーム程、選手に関わり続けることができていた。

また、3ブロックは守備時のCKや背後へ流れてきたボールに対し、「慌てるな!」「時間使え!」等、局面や試合状況(スコア)に応じた判断を促す声掛けができていて、味方の観えていない部分へ投げ掛けることにより、個々の判断ではなく、チームとしての共通理解をゲーム中に深めていることが素晴らしいと感じた。ベンチからのコーチングを含め、チームとしての一体感が生まれていた。

判断の伴った具体的なコミュニケーションを求めればキリがないが、①②で提起しているプレーモデルを整理し、選手個々に対しても、チーム全体に対しても、局面に応じたコミュニケーションを求めていきたい。

⑤リスペクトの心をもてる

研修大会であるため、選手・コーチ・レフリーが、良い意味で切り換えながら試合に臨んでいる様子が伺えた。相手の立場に立ち(リスペクト精神)、考え行動することができているのではないかと思われた。限られた施設環境の中で、関わる全ての方々が、譲り合い、思いやりの心を持ちながら過ごすことができたと感じた。

総評

特に、ミドルレンジからのゴールが多く観られた大会であったと印象に残っている。トップには、強靱なフィジカルで突破力のある選手が多く、3ブロックNo.7や14ブロックNo.9の選手等、大きなインパクトを与えていた。

1試合平均4.5得点という数字は、守備の失点として視点を変えると、課題の他ならず、センターバックとゴールキーパーの養成が急務であると感じた。それが、世界に通用するストライカーの養成とリンクし、シナジー効果を生み出すはず。また、個々の能力だけでなく、前線からのアプローチを意識するがあまり、反対サイドや2列目等、奪い切れなかった時に、守備の組織としてスペースのケアができるようになることも課題である。インテンシティ高く前線からボールを奪うことを求めながらも、失点しないことにもフォーカスしていきたい。

こちらの会場では、16ブロックの女子選手達が戦い、No.61の選手は、男子にも負けないスピード感溢れるプレーとテクニックで、今後の活躍に期待を抱かせてくれた。この様な選手がいてくれることで、No.56からのアシスト等、質の高いプレーに合わせなければならぬシチュエーションが多く生まれ、女子全体のボトムアップだけでなく、フルアップしてくれる存在としても期待が持てる。

全ピリオドが共通のコンセプトで取り組む5ブロックや16ブロック、選手の特徴に合わせたブロックなど、各ブロックで特色があり、今後も、ブロック間で切磋琢磨できる環境として、5年生選抜研修大会の意義を感じることができた。

2日目は、雪の影響により開催が危ぶまれたが、プレーできる状態まで雪掻きをしてくださった施設管理の皆様を筆頭に、大会に関わる全ての皆様へ感謝申し上げます。ありがとうございました。